

日本の放送局「これからの5年」 各社のIP・クラウド活用提案から見る

文:高瀬徹朗・本誌レポーター

リアルとオンラインの並列開催という変則的なスタイルとなったものの、東京オリンピック・パラリンピック後の未来に向けてふさわしい内容がそろっていた。ここでは、主にIP・クラウド関連の展示に着目しつつ、各社アプローチの違いなどから放送局の「これからの10年」、いや「5年」の方向性を探っていく。

「KAIROSクラウド」登場で リモート制作化を加速

コロナ禍真ただ中の2020年9月にIT／IPプラットフォーム「KAIROS」を発売し、従来のハードウェア中心路線からソフトウェア路線への放送機器大転換を図るとともに、IP活用・リモートプロダクションの推奨を本格化したパナソニック。2022年春にサービスを開始する予定の「KAIROSクラウドサービス」投入により、その方針を加速する構えだ。

「KAIROSクラウドサービス」は、文字どおりオンプレミスの「KAIROS」をクラウド上に構築し、初期投資コストを抑えつつ映像制作から配信までのワークフローをより手軽に行えるようにするための提案だ。オンプレ設備の位置にこだわらない作業拠点の分散やネットワーク

ベースの素材共有・受け渡しを容易にするスタイルは、目的の一つであるリモート制作の推進を一層強めるサービスとして期待される。

プロ用途にも適した4Kインテグレートドカメラ「AW-UE80W/K」を投入するなど、ローエンドからハイエンドまでリモートカメラ市場の高いシェアと豊富なラインナップを誇るパナソニックの提案は、制作現場のリモート化を意識しているのも特長。IPバビリオン内で展開された「5G活用による伝送／制御」デモでは、会場である幕張と朋栄本社のある東京・恵比寿をネットワークで接続し、会場の「KAIROS」で恵比寿のリモカメを制御しつつ映像伝送する取り組みも行われた。

現状の5Gでは、変換時間含め遅延量はやや大きく、操作バーでのマニュアル制御は難易度が高い印象。事前に動きをプリセットされ

たスイッチによる制御はスムーズに行えていたので、実践でもこちらがメインとなるかもしれない。

なお、先の東京オリンピックのポート・カヌー競技会場となった海の森水上競技場では、「KAIROS」を使った運用実証を実施。会場に設置されたLED大型得映像表示装置への高精細出力やPinP／ロゴ挿入などの映像編集に用いられ、実際に運用したOBSの担当者から高い評価を得たという。

独自AIを軸に ワークフロー軽減を図るソニー

前回のInter BEEにあわせて国内での提供を開始したクラウドベース映像制作コラボレーションツール「Ciメディアクラウドサービス」に続き、カメラと連携したクラウドサービス「C3



2022年春から投入する「KAIROSクラウドサービス」のコンセプトをアピールするパナソニック



クラウド上のAI活用で効率的な素材管理などを提案したソニー